

それによって疲弊した地域イメージを明るく方向へ転換しようという思いですね。それに水俣病問題で傷ついた地域の方々を癒すのは美しいものであったり音楽であったり、そういった文化的なものなんではないだろうかということもあつたんです。さらに言うとうと都会と田舎の大きな差はなんだろうということも考えたとき、一番の格差があるのは経済よりも文化だと考えたんですね。都会には美術館があり文化ホールがあり、いつでも文化的なものに触れられる環境が整っている。その格差をどうにかしたいという思いです。このようにきつかけひとつにしてもこの町づくりには色々な思いが込められているんです。そうやってスタートしたこの取り組みですが、はじめのうちは色々ありました。公衆の面



前に裸の銅像はどうなんだという話もありましたしね。野外彫刻が認められるようになったのはあけぼの橋に立っている爽風が建設省(当時)の第1回手づくりふるさと賞をいただいたからですかね。その爽風について、あそこは県道ですよ。県の持ち物の上に町の彫刻を立てるもんだから最初は駄目だつて言われましたよ。でもあれは橋の高欄と一緒にどうにかすることでどうにか認めてもらいました。しかも重たいものを立てるから構造計算もやり直していただきました。話し出すと本当に色々ありますね。美術館を作るときはモノレール建設費に対して宝くじの助成金を1億円いただきましたし、本館に対しては国土庁(当時)の補助金をいただきました。財源面の工夫をするために国や県には本当にいろんな説明やお願いもしてきましたね。それから彫刻について少し説明すると、彫刻というのはただ設置すれば良いというわけではないんですよ。彫刻を買ってただ設置するのは「置く」彫刻です。我々が提唱しているのは緑と彫刻の「ある」まちづくり。緑とは美しい自然などを象徴したもので彫刻は芸術品などの人工美を象徴したものです。それら

が融合してはじめて意味があるものですからね。

西平 これは難しい質問かもしれませんが、町長の中で思い入れのある彫刻はありますか。

町長 それぞれに良さがありますからね。それがどうということではなく、それぞれがいいんだと思いますよ。しいて言えばあの3体ですかね。橋の上に設置された「爽風」「薫風」「風ん子」は、父・母・子どもたちの平和で理想的な家庭を表しています。町としては人口が増えていって欲しいという祈りも込めていますし。

西平 それでは、緑と彫刻のあるまちづくりの今後の展開について少しお話しただけますでしょうか。

町長 これから彫刻をどんどん増やしていくというのはないですね。それこそ「置く」彫刻は不要です。緑と彫刻のあるまち、その空間づくりをどうするかをもう一度トータルで考え、必要な空間があれば設置することもあると思います。ただこれからは今まで整備したものを活かしながら、感性を磨いたりだとか心の豊かさだとかを感じられるような取り組みを地道にやっていく。美術館でも先進的な取り組みとして住民参加型のアー

トプロジェクト等に取り組みんでいます。学校や地域と連携しながらそういったことを継続してしていくことが重要だと思います。それから町全体の環境整備ですね。彫刻の周辺をはじめ美しい佇まいのまちづくりを目指してやっていくことが大切だと思います。

「町の将来像等について」

塩崎・西平 それでは最後に、これから町が目指すべき将来像や将来を担う若者に期待することについてお聞かせください。

町長 目指すべきは、何といつても元気のある町。お年よりも元気。若者も元気。子ども達も元気。これはもちろん精神的にも肉体的にもね。そのためにはいろんな課題があります。町の強みや弱みなどをしっかり分析して、町づくりのメインテーマである「住みたくなるまちづくり」をしつかりやっていかなといけません。雇用の場の確保など現実的な課題に対しては役場もお手伝いをさせていたがながらしつかりやらないといけないと思います。その他の部分では、やっぱり「心の豊かさ」をいかに実現していくかがキーワードになると思いますね。みんなが仲



良く楽しくやる。元気な町って言うのは一言で言うとなんか感じではないですかね。

それから若い人たちに對してお願ひしたいのは、まず正直であつて欲しいということ。言い訳はしないで素直に謝る心がけとか人の悪口を言わないとかそんなことでしょうか。それから時間を守るとか生活を律するとかそういった基本的なことが信頼につながると思います。先輩達のいいところを見て学んで欲しいと思いますね。

塩崎・西平 本日はお忙しい中にもどうもありがとうございます。私たちも住みたくなるまちづくりの実現に向けて全力で頑張りたいと思います。